

ば其跡の孔へも亦蜜を貯はふ、凡蜜はじめは甚淡しき露なり、吐積んで日を経れば、甘芳日毎に進こと、實に人の酒を釀するに等し、既に露孔に盈る時は、其表を閉て、一滴一氣を洩すことなし、蜂の數多ければ、氣味も厚し、蜂は小なり、大きき五歩許、マルハチに似て、黄に黑色を帶、多群て、花を採る物は、巢を造ず、巢を造ものは、花を採らず、時々入替りて、其役をあらたむ、夫が中に蜂王といひて、大きな蜂一あり、其王の居所は、黒蜂の巢の下に一臺をかまふ、是を臺といふ、その王の子は、世々繼で王となりて、元より花を採ることなく、毎日群蜂輪値に、花を採りて王に供す、是一桶に一個のみなるに、子を産むこと、雌雄ある物に同じ、道理においては希異なり、群蜂是に従侍すること、實に玉體に向がごとし、又黒蜂十許ありて、是を細工人と呼ぶ、孔口を守りて、衆蜂の出入を檢め、若花を持たずして、孔に入らんとするものあれば、其懈怠を責て、敢て入ることを許さず、若再三に怠る者は、遂に螫殺して、軍令を行なふに異ならず、凡家にあるも野にあるも、儀におゐては同じ、願脾 大王の子成育に至れば、飛で孔を出るに、群蜂半従がふて、恰も天子の行幸のごとく、擁衛甚嚴重なり、其飛行こと、大抵五間より十間の程にして、木の枝に取附ば、其脊其腹に重り留りて、枝より垂たるごとく、一團に凝集り、大王其中に核のごとく、裹まる、畜人は是を逐て、袋を群蜂の下に承けて、羽箒を以て、枝の下を掃がごとくに、切落せば、一團のまゝにて、其袋中へおつる、其音至て重きがごとし、註 是を用意の箱に移し、畜なふを、脾 脾わかれといふて、人の分家するに等し、若其一團の袋へ落るに、早く飛放る者ありて、大王の従行に洩れて、其至る所を知らず、又原の巢へ飛歸る時は、衆蜂敢て孔に入ることを不許、争ひ起て、是を螫殺し、其不忠を正すに似たり、略 彼王一群ごとくの中に、必一あり、巢中に王三つある時は、群飛も三にわかる、略 下

〔栗氏蟲譜上〕江都官家ニ蜂堂ヲ庭上ニ設テ、蜜ヲ採テ戯トシ玉フコトアリ、堂内部局ヲ構ヘ、其上ノ奥所、蜂王ノ座アリ、群臣次第ニ列座シテ、自然ニ官職アルガ如シ、下ニ聚花ノ會場アリ、大窠ヲ